教学IRレポート

第6号

教育効果検証

はじめに

このたび，2025 年度学修動向調査アンケートと卒業時アンケートのデータを収集し，学部全体及び各学科専攻の学修行動・成長実感や GPA を分析しました。教育改善を目的として教務委員会の指示を受けて，分析を行っています。そして，分析結果に基づいて，教務委員会及び学長室会で今後の教育改善について検討していただきました。

《対象期間》

学生動向調査は 2025 年度 9 月下旬から 12 月下旬まで実施された。

卒業時アンケートは 9 月下旬から卒業式前日までに回答が収集された。

《回答者》 右の内訳のとおり。

所属	1年生	2年生	3年生	4年生	総計
心理臨床学科	61	26	54	75	216
児童教育専攻	33	39	11	37	120
保育・幼児教育専攻	8	22	4	23	57
キャリア・イングリッシュ専攻	18	20	16	32	86
総計	**120**	**107**	**85**	**167**	**479**

《対象データ》

・**学生活動時間**:「授業への出席」「予習・復習・課題学習」「授業と直接関係しない自主的な学習」「部活動・サークル活動」「アルバイト・定職」「自主的なボランティア活動」について，平均的な 1 日の生活の中でどの程度の時間活動しているかを尋ねた。（1．全くない，2．30 分間未満，3．30 分以上 1 時間未満，4．1 時間以上 2 時間未満，5．2 時間以上 3 時間未満，6．3 時間以上 4 時間未満，7．4 時間以上 5 時間未満，8．5 時間以上 6 時間未満，9．6 時間以上）

・**学修行動**:授業以外の時間で，「図書館利用」「インターネット利用」「他学生との共同学習」「教員への質問・相談」「職員への質問・相談学修行動」をどの程度行ったかを尋ねた。（1．ほとんどしなかった，2．あまりしなかった，3．まあまあした，4．かなりした）

・**知識能力成長実感**:「専門分野に関する知識・理解」「知識・スキル・態度・価値観」「文献・資料を収集・分析する力」「論理的に文章を書く力」「人に分かりやすく話す力　　」「外国語を使う力」「DS に関する知識・技能」「問題発見・解決的思考力」「多様な人々と協働する力」「幅広い知識や見方」「異なる文化に関する知識・理解」がどの程度身についているかを尋ねた。（1．身に付いていない，2．あまり身に付いていない，3．ある程度身に付いている，4．身に付いている）

・**2025 年度末累積 GPA**:学生の能力成長の客観的指標として，GPA データを使用した。

《分析方法》

・**1 コマあたりの予習・復習時間（分）**:「授業への出席」の回答データを右の代表値に変換して 1.5 時間で除して，出席したコマ数を算出した。「予習・復習・課題学習」の回答データも右の代表値で除して時間単位に変換し，出席したコマ数でさらに除して，それを 1 コマあたりの予習・復習時間（分）とした。

選択肢	代表値（時間）
全くない	0
30分間未満	0.25
30分以上1時間未満	0.75
1時間以上2時間未満	1.5
2時間以上3時間未満	2.5
3時間以上4時間未満	3.5
4時間以上5時間未満	4.5
5時間以上6時間未満	5.5
6時間以上	6.5

・**学修行動**:各項目について「3．まあまあした」と「4．かなりした」の人数割合（%）を，全体及び学年・学科専攻ごとに算出した。

・**知識能力成長実感**:各項目について「3．ある程度身に付いている」と「身に付いている」の人数割合（%）を，全体及び学年・学科専攻ごとに算出した。

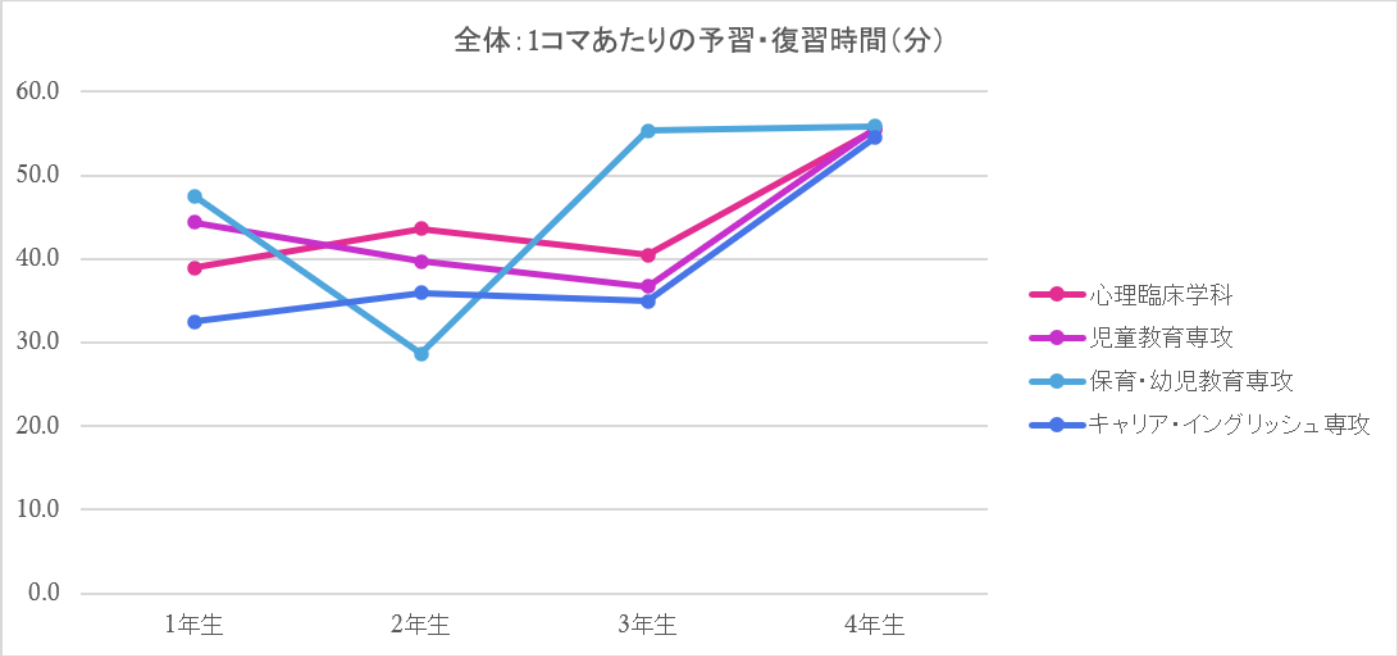
・**知識能力成長実感や累積 GPA に及ぼす学生活動時間・学修行動**:知識能力成長実感や累積 GPA にどのような学生活動の時間や学修行動が関与しているかを検討するために，学部全体で学年を統制した偏相関係数を算出した。

予習・復習時間

予習・復習・課題など授業に関する学習（授業で求められる技術や表現の練習も含む）について，学科専攻ごとに各学年で平均値を算出した。4 年生ではどの学科専攻も予習・復習や課題にかける時間が増加していた。

保育・幼児教育専攻では 2 年生と 3 年生のギャップが大きいが，入学年度による違いか，科目授業や課題の多さによる違いかは明確ではない。

「学習時間」の定義をさらに明確化した上で，期末試験対策の場合とそうでない場合での学習量などを再調査する必要がある。また，科目別の学習時間の調査して，シラバスの記載内容の妥当性を検証する必要がある。



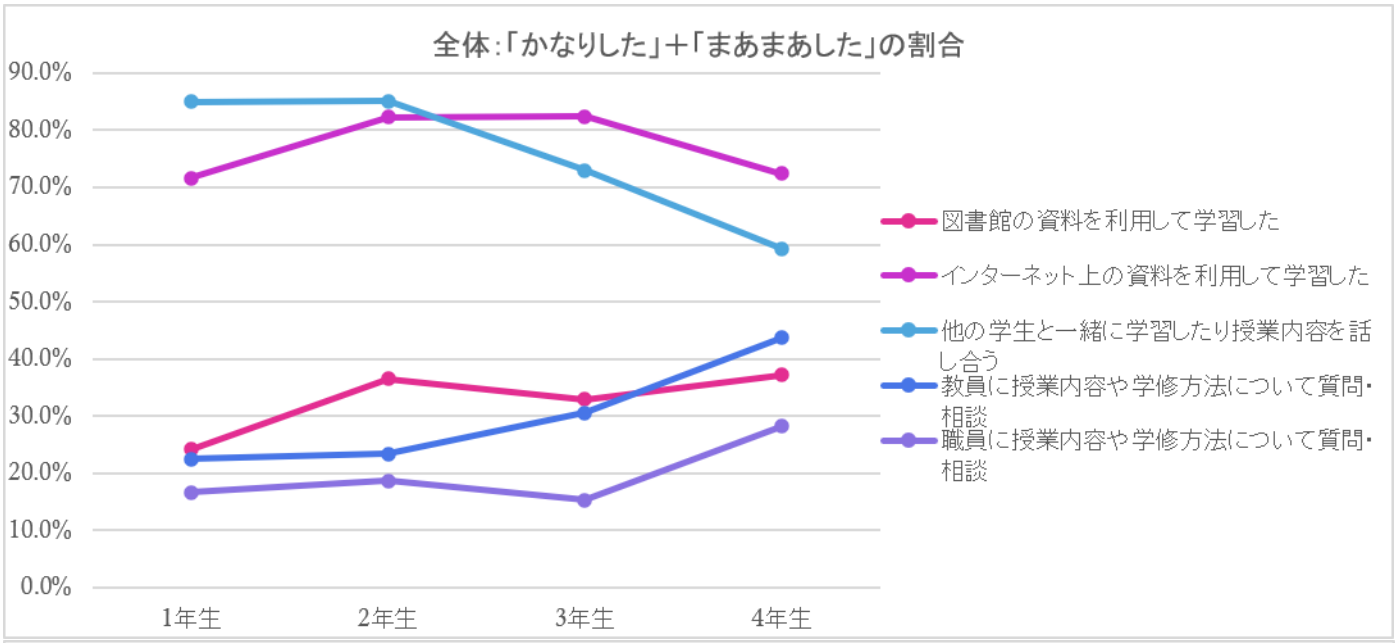
学修行動

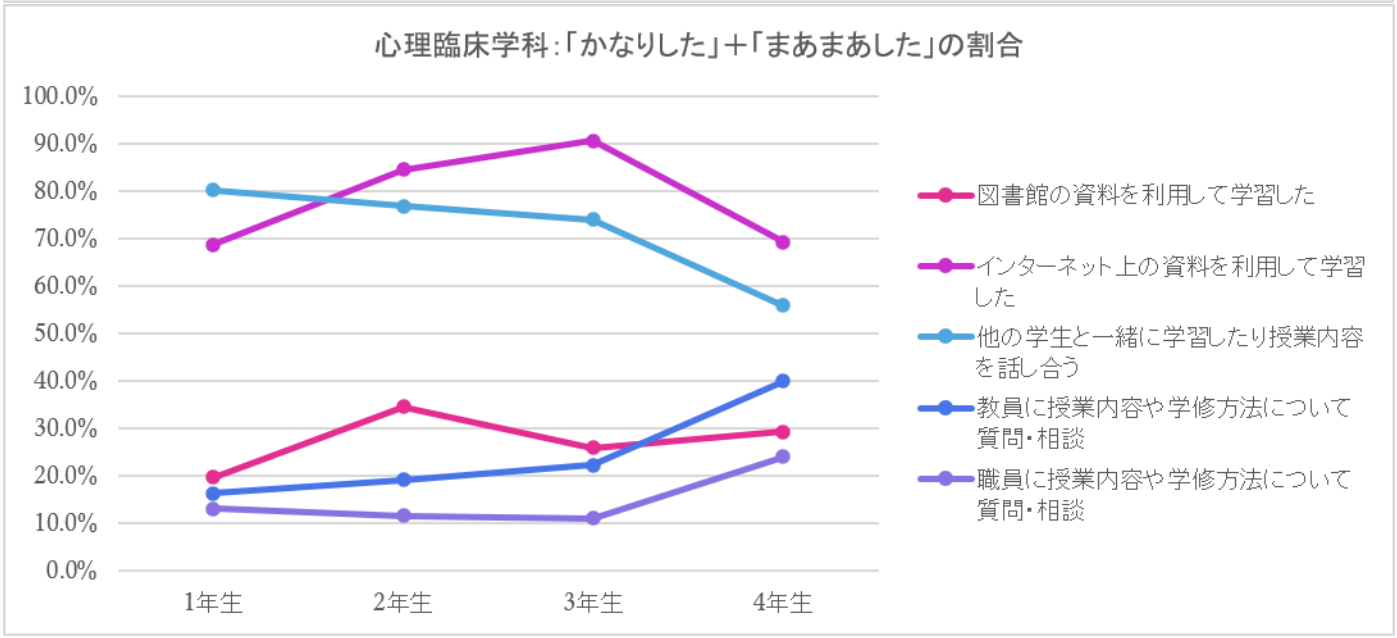
全体及び学科専攻ごとに，各学修行動で「３．まあまあした」と「４．かなりした」の人数割合平均を学年ごとに算出した。

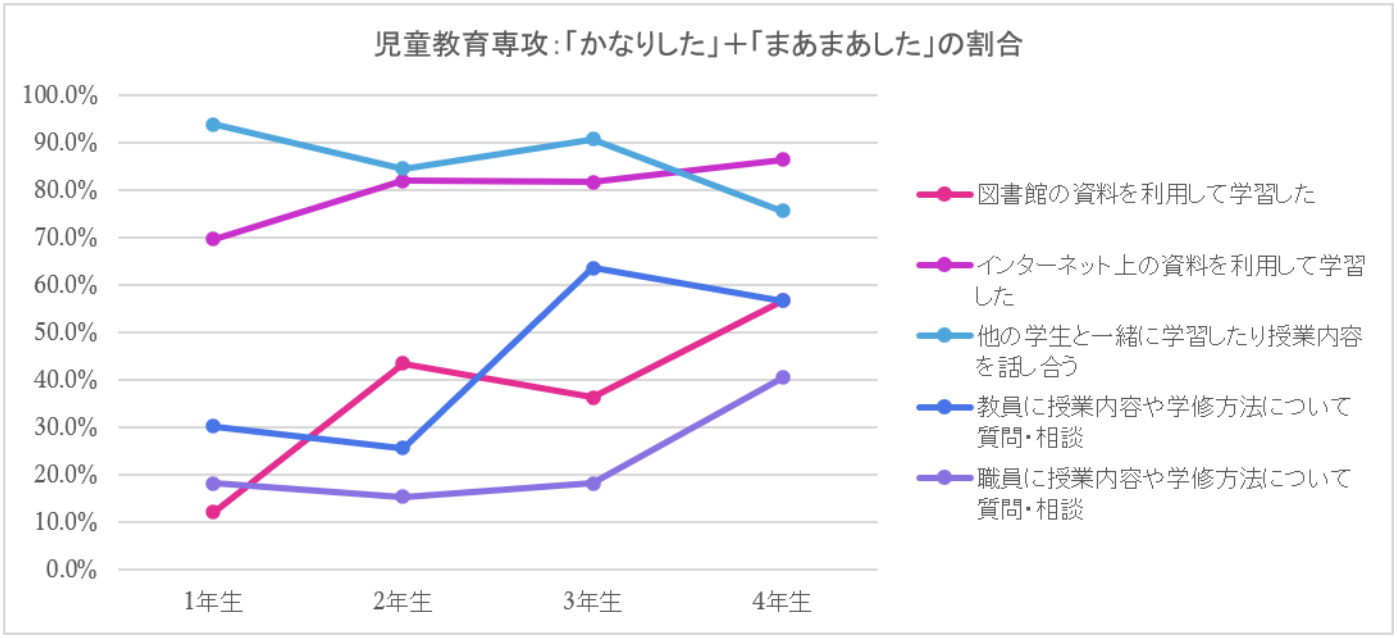
どの学科専攻でも，他の学生と一緒に学習する行動が多いが，４年生になると少なくなる。

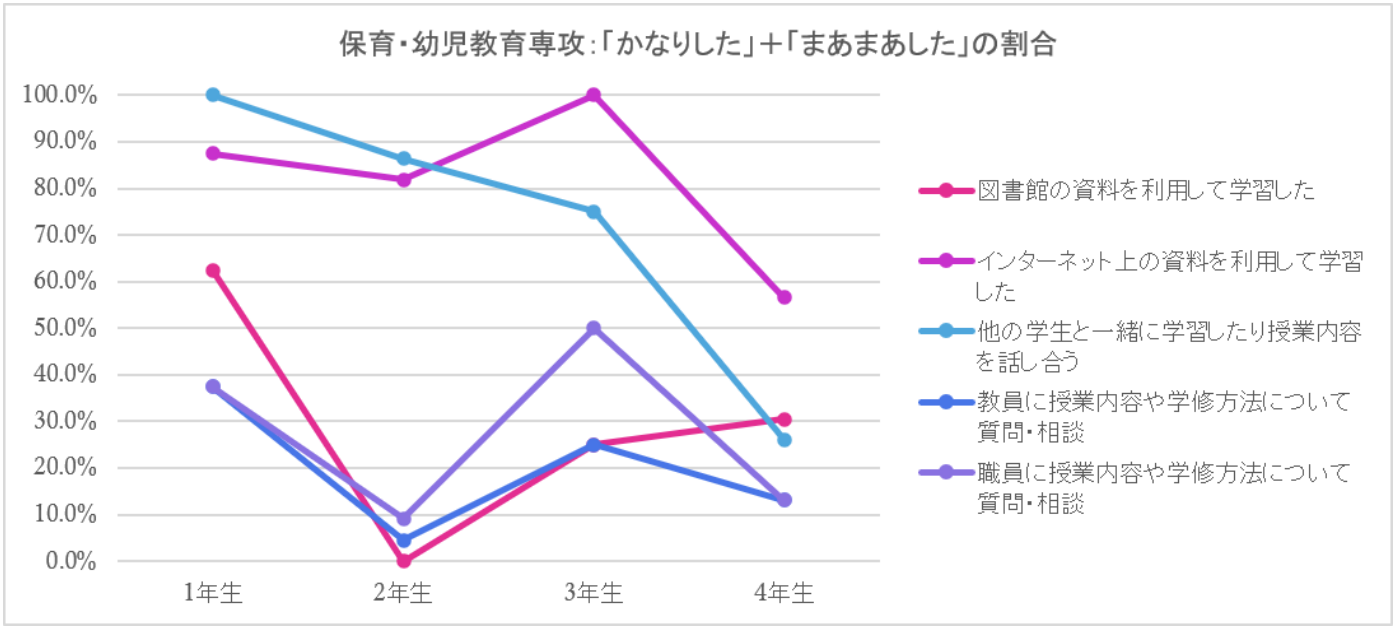
どの学科専攻でも学年を通じて，図書館の資料の利用よりもインターネット上の資料の利用が上回っているが，図書館の資料とインターネット上の資料を利用する場面や資料内容の違いをさらに確認する必要がある。

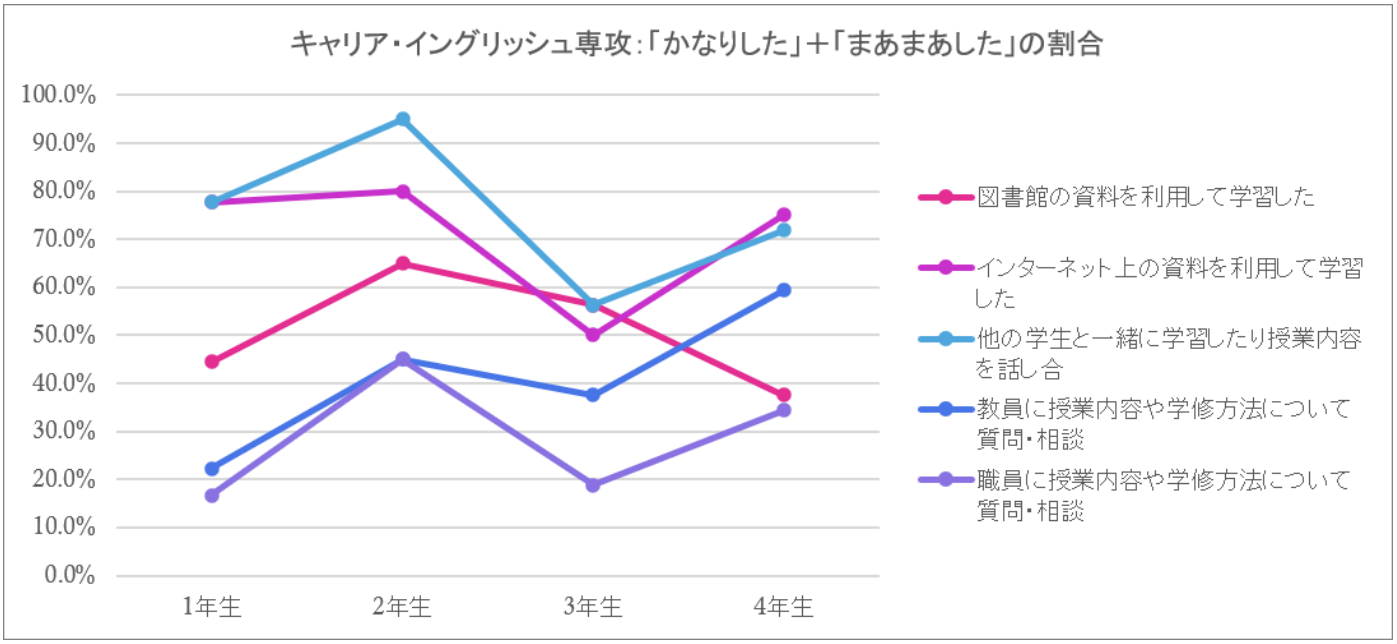
授業内容や学修内容を質問・相談する対象が教員と職員のどちらが多いかは学科専攻によって異なるが，４年生になると特に質問・相談が増加する。実際に質問・相談内容がどのようなものなのかを把握し，相談内容ごとに相談対象が教員か職員かを把握できると，質問・相談体制の充実している部分と今後対応が必要な部分を確認できる。






児童教育専攻:「かなりした」+「まあまあした」の割合
100.0%
90.0%
80.0%
70.0%
60.0%
50.0%
40.0%
30.0%
20.0%
10.0%
0.0%
1年生
2年生
3年生
4年生
図書館の資料を利用して学習した
インターネット上の資料を利用して学習した
他の学生と一緒に学習したり授業内容を話し合う
教員に授業内容や学修方法について質問・相談
職員に授業内容や学修方法について質問・相談


保育・幼児教育専攻:「かなりした」+「まあまあした」の割合
100.0%
90.0%
80.0%
70.0%
60.0%
50.0%
40.0%
30.0%
20.0%
10.0%
0.0%
1年生
2年生
3年生
4年生
図書館の資料を利用して学習した
インターネット上の資料を利用して学習した
他の学生と一緒に学習したり授業内容を話し合う
教員に授業内容や学修方法について質問・相談
職員に授業内容や学修方法について質問・相談

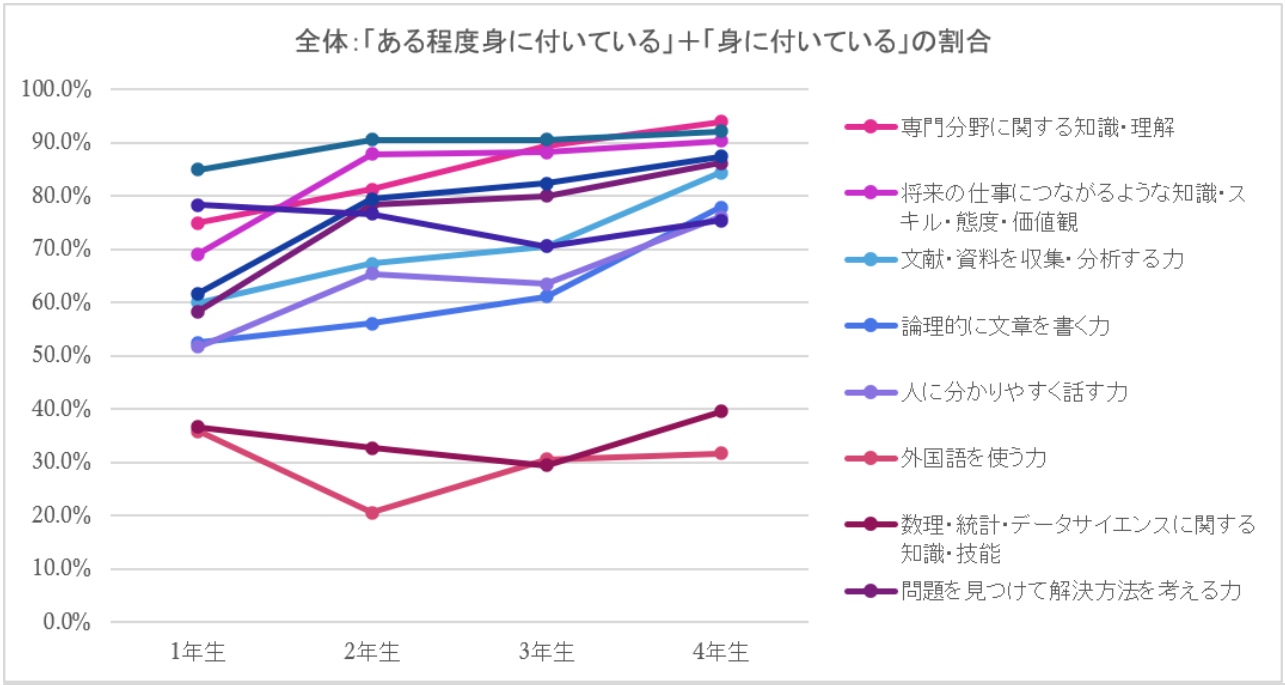

キャリア・イングリッシュ専攻:「かなりした」+「まあまあした」の割合
100.0%
90.0%
80.0%
70.0%
60.0%
50.0%
40.0%
30.0%
20.0%
10.0%
0.0%
1年生
2年生
3年生
4年生
図書館の資料を利用して学習した
インターネット上の資料を利用して学習した
他の学生と一緒に学習したり授業内容を話し合
教員に授業内容や学修方法について質問・相談
職員に授業内容や学修方法について質問・相談

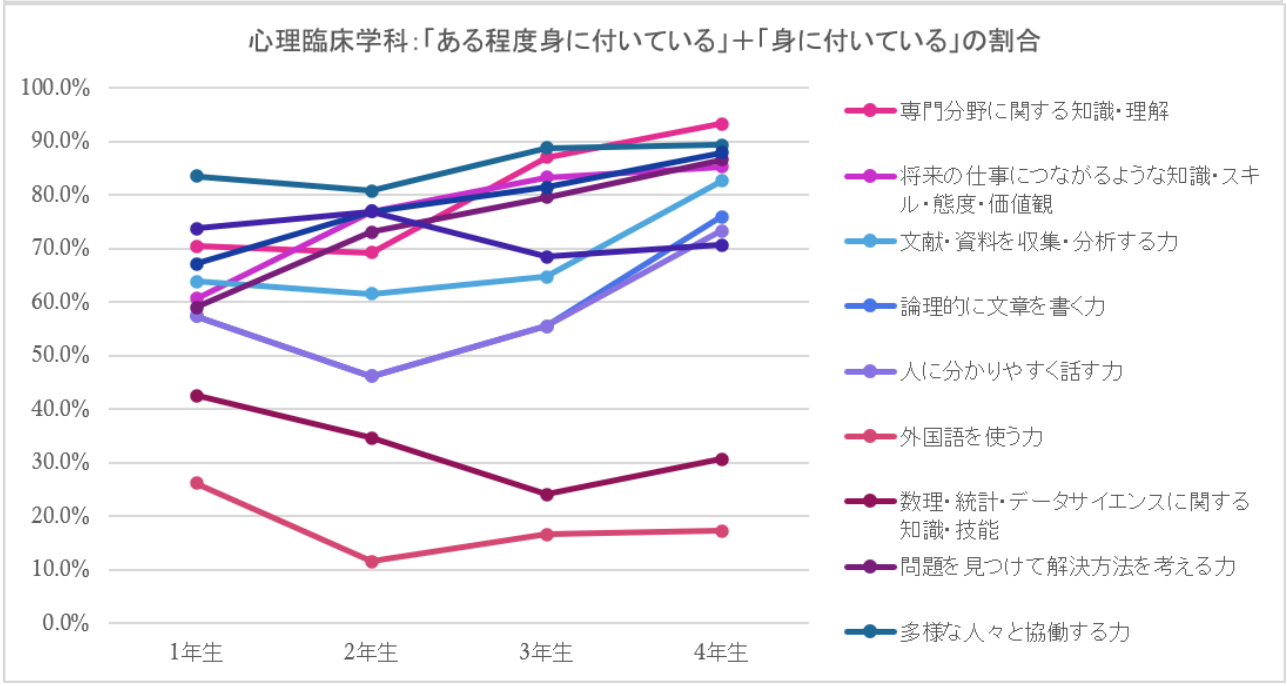
知識能力成長実感

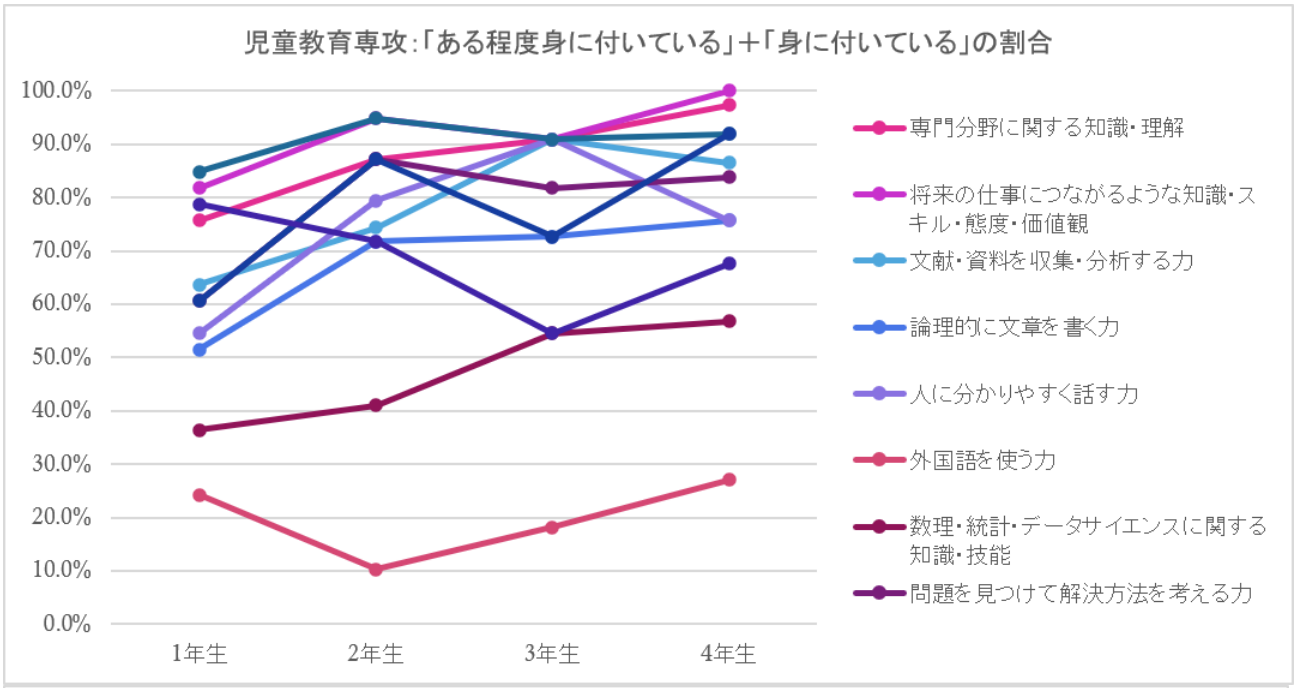
学部全体で見ると，外国語を使う力やデータサイエンス知識・技能以外の知識能力は各学年で身についている実感を持っている学生が多く，学年進行とともに少しずつ上昇している。

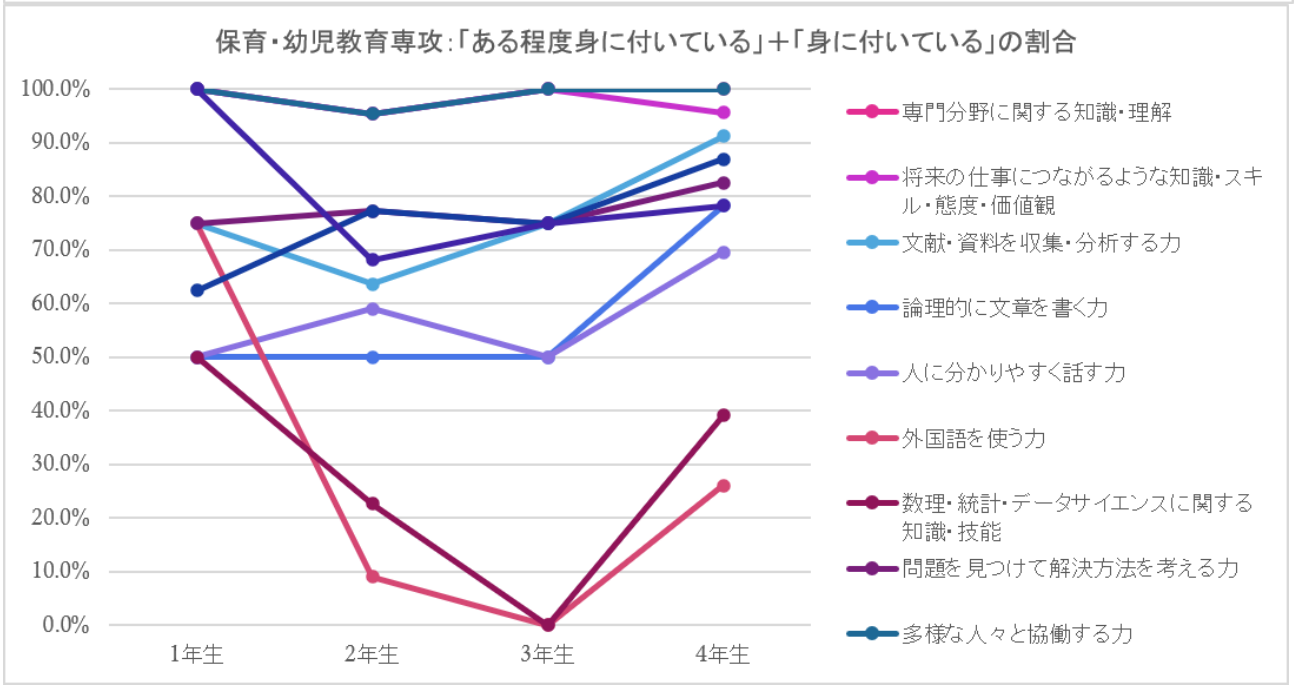
児童教育専攻とキャリア・イングリッシュ専攻ではデータサイエンス知識・技能が身についている実感のある学生数が学年進行とともに上昇しており，どのような知識・技能がどのような科目や教育体制で上昇しているのかをさらに調べる必要がある。

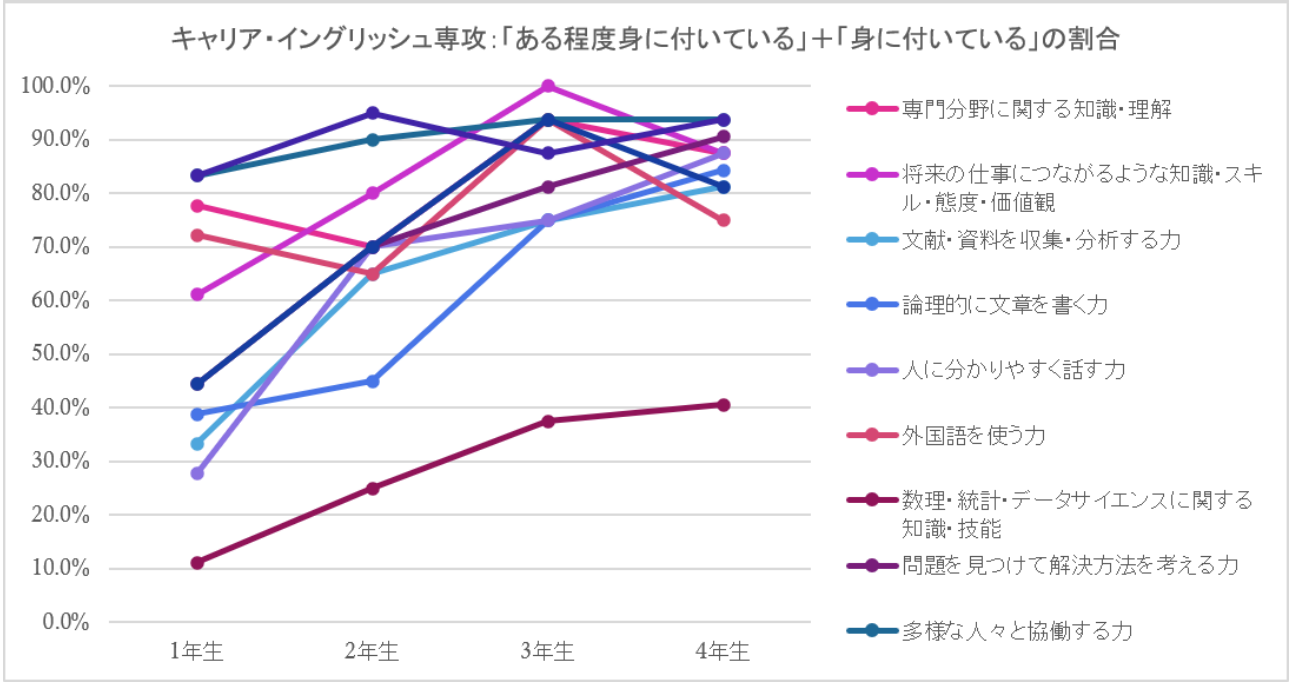
外国語を使う力については，キャリア・イングリッシュ専攻以外の学科専攻では身についている実感をもつ学生が少ない。また，データサイエンス知識・技能については全学的に身についている実感を持つ学生が少ない。これらの知識・技能を身につけることができる教育体制が整えば，学生の将来的な仕事分野・活動領域が拡大し，就職領域の幅を広げる可能性が考えられる。






児童教育専攻:「ある程度身に付いている」+「身に付いている」の割合
100.0%
90.0%
80.0%
70.0%
60.0%
50.0%
40.0%
30.0%
20.0%
10.0%
0.0%
1年生
2年生
3年生
4年生
専門分野に関する知識・理解
将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観
文献・資料を収集・分析する力
論理的に文章を書く力
人に分かりやすく話す力
外国語を使う力
数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能
問題を見つけて解決方法を考える力


保育・幼児教育専攻:「ある程度身に付いている」+「身に付いている」の割合
100.0%
90.0%
80.0%
70.0%
60.0%
50.0%
40.0%
30.0%
20.0%
10.0%
0.0%
1年生
2年生
3年生
4年生
専門分野に関する知識・理解
将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観
文献・資料を収集・分析する力
論理的に文章を書く力
人に分かりやすく話す力
外国語を使う力
数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能
問題を見つけて解決方法を考える力
多様な人々と協働する力


キャリア・イングリッシュ専攻:「ある程度身に付いている」+「身に付いている」の割合
100.0%
90.0%
80.0%
70.0%
60.0%
50.0%
40.0%
30.0%
20.0%
10.0%
0.0%
1年生
2年生
3年生
4年生
専門分野に関する知識・理解
将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観
文献・資料を収集・分析する力
論理的に文章を書く力
人に分かりやすく話す力
外国語を使う力
数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能
問題を見つけて解決方法を考える力
多様な人々と協働する力

GPA 及び知識能力成長実感と学生活動時間の相関関係

全体で相関を検討したが，実質的に関連あるとされる相関係数の絶対値は 0.163 以上であるので，その値より大きい場合は黄色でマークし，0.20 以上の弱い相関以上の相関を示している場合はオレンジ色でマークした。

GPA は予習・復習・課題学習の時間の長さと正の弱い相関が示された。予習・復習・課題学習にかける時間が長い学生ほど，知識やスキルを伸ばすか，課題に対する高い評価を得るかして，GPA が高くなることが示唆された。予習・復習・課題学習が GPA を引き上げる効果がある可能性が示唆され，予習・復習・課題の内容や提示の仕方を工夫することがより一層期待される。

また，弱い相関ではあるが，論理的に文章を書く力が身についていると実感している学生ほど，授業に直結しない学習に自主的に取り組んでいる時間が長いことが示された。授業に直結しない学習内容は具体的に，読書，ディスカッション，資格試験の勉強，学外での講座・講習等が考えられるが，どのような内容が論理的に文章を書く力に繋がっているかを明らかにすると，本学でもより良い教育支援を展開できると思われる。

全体(N=482) 0.163(α=0.05, 1-β=0.95)	授業への出席	予習・復習・課題学習	授業と直接関係しない自主的な学習	部活動・サークル活動	アルバイト・定職	自主的なボランティア活動
累積GPA	0.130**	0.225***	0.124**	0.083	-0.128**	0.018
専門分野に関する知識・理解	0.079	0.062	0.092*	0.103*	0.018	0.099*
知識・スキル・態度・価値観	0.077	0.073	0.164***	0.143**	0.099*	0.128**
文献・資料を収集・分析する力	0.04	0.109*	0.158***	0.118**	0.127**	0.102*
論理的に文章を書く力	0.049	0.103*	0.211***	0.058	0.105*	0.064
人に分かりやすく話す力	0.015	0.048	0.148**	0.125**	0.176***	0.161***
外国語を使う力	-0.003	0.068	0.180***	0.017	0.082	0.007
DSに関する知識・技能	0.117**	0.135**	0.152***	0.090*	0.075	0.074
問題発見・解決的思考力	0.021	0.075	0.159***	0.089*	0.047	0.066
多様な人々と協働する力	0.045	0.129**	0.095*	0.162***	0.084	0.105*
幅広い知識や見方	0.023	0.049	0.161***	0.107*	0.090*	0.059
異なる文化に関する知識・理解	-0.075	0.016	0.116*	0.004	0.143**	-0.027

*p<0.05, **p<0.01, **p<0.001

GPA 及び知識能力成長実感と学修行動の相関関係（2023 年度入学者）

GPA の高さは図書館の資料を利用することの多さや他学生との共同学習がディスカッションの多さと弱い相関があることが確認された。図書館資料利用や他学生との共同学習がどのようにして GPA を引き上げるかのメカニズムはよく分からないが，それらの学習行動が GPA を引き上げる効果があるこ可能性が示唆された。図書館活用と他学生との共同学習を促すことは，今後の本学の大きな教育方針になりうる。

また，他学生との共同学習は人に分かりやすく話す力，問題発見・解決的思考力，多様な人々と協働する力にも弱い相関ながらも関係し，他学生との共同学習やディスカッションを促すような授業や教育が効果的であることが確認された。

そして，教員や職員に授業内容や学修方法を質問・相談することの多さは，論理的に文章を書く力や人に分かりやすく話す力を身につけている実感の高さと正の弱い相関が確認された。教員や職員に質問・相談する上で，学生は教員・職員に対して理解してもらえるように，論理的記述や他者視点的発言を身につけていくことが窺え，意外な教育効果があることが示唆された。

全体(N=482) 0.163(α=0.05, 1-β=0.95)	図書館利用	インターネット利用	他学生との共同学習	教員への質問・相談	職員への質問・相談
累積GPA	0.249***	0.141**	0.211***	0.106*	0.082
専門分野に関する知識・理解	0.082	0.068	0.182***	0.176***	0.131**
知識・スキル・態度・価値観	0.03	0.031	0.193***	0.175***	0.141**
文献・資料を収集・分析する力	0.076	0.145**	0.155***	0.152***	0.132**
論理的に文章を書く力	0.083	0.069	0.180***	0.257***	0.227***
人に分かりやすく話す力	0.089	-0.017	0.244***	0.256***	0.212***
外国語を使う力	0.174***	0.035	0.098*	0.221***	0.190***
DSに関する知識・技能	0.038	0.025	0.065	0.114*	0.081
問題発見・解決的思考力	0.150***	0.127**	0.210***	0.193***	0.197***
多様な人々と協働する力	-0.003	0.03	0.234***	0.100*	0.118**
幅広い知識や見方	0.069	0.065	0.152***	0.102*	0.123**
異なる文化に関する知識・理解	0.083	0.011	0.121**	0.096*	0.109*

*p<0.05, **p<0.01, **p<0.001

教育改善検討

教務委員会・学長室会による検討と改善

教務委員会（2026 年 9 月 3 日）及び学長室会（2026 年 9 月 10 日）に上記の分析結果に基づいて、本学の教育方法・教育内容・教育体制に関する検討が行われた。

教育改善課題

学生動向調査の結果から、1 コマ当たりの予習・復習時間は「30～60 分未満」が中心となっており、予習・復習・課題等に充てる授業外の学修時間をいかに確保するかが課題として議論された。ただし、回答に、小テスト・期末試験のための学修、関連資料の閲覧等が含まれていない可能性があり、実際に、授業外でどのような学修が行われているのか、より詳細な確認が必要であることも確認された。

図書館資料を利用した学習は、「かなりした」と「まあまあした」の回答を合わせた割合が 50%を下回っていた。

成長実感については、「語学」及び「数理・統計・データサイエンス」の一部で、「ある程度身についている」と「身についている」の回答を合わせた割合が 50%を下回る結果であった。

既に実施済みの教育改善事例

図書館資料を利用した学習については、図書館の利用方法を初年次に学修する機会を設けることが検討され、2026 年度より「フレッシュマン・ゼミⅠ」で少人数での図書館オリエンテーションを実施し、図書館資料を利用した学習を促すことに取り組んでいる。

また、「語学」の成長実感の低迷については、初年次の全学共通英語教育に注力する試みとして、2026 年度から全新入生にプレイスメントテストを導入し、入学時と前期終了時に英語力の変化を把握できる仕組みを整備している。こうしたテストの導入によって新入生の英語学習のモチベーションが高まることが期待される。そして、キャリア・イングリッシュ専攻、心理臨床学科に加え、児童教育専攻でも英語習熟度別にクラスを編成し、習熟度に応じた教育実践に取り組んでいる。

今後の教育改善案

①授業外学修：学生の実際の学修内容と時間をより正確に把握した上で、十分な事前・事後学修につながる課題設定や授業構成等について検討する必要がある。自主的な学習や学生同士の共同学習が学修成果に寄与していることから、その実態を把握した上で、学生が主体的・協働的に学ぶための課題設定や授業構成等を検討する。

②数理・統計・データサイエンスについては、学生がどのような知識・能力を「身に付いた」と捉えているのか、結果の詳細をさらに確認する必要がある。また、卒業生・雇用先アンケートでも ICT 活用力を身に付けたい卒業生が多数いることが確認されているため、教育課程及び授業の両面の充実を図ることとなった。具体的には、情報の収集・整理・分析・発信や、課題発見、計画・実行、振り返りの力を育成するために、卒業研究、ゼミ活動、実習、サービスラーニング等の実践的な学修の場を多く作ることを、課程と授業の各レベルで求める。

③学生の英語力の伸長及び実社会で活用できる ICT 活用力の育成に向けて、現在の取組の効果を検証するとともに、共通教育における英語・データサイエンス・ICT 関連科目はその授業内容や科目体系化を見直し、英語やデータサイエンス・ICTを実社会や現場で活用できるような教育体制の整備を進める。

発行
〒860－8520　熊本市中央区黒髪3－12－16
九州ルーテル学院大学
IR・情報センター／総務課 IR 情報室
2026年9月17日発行